

『古代アメリカ』14, 2011, pp.67-76

<調査研究速報>

アステカ王国主都の主神殿出土遺物に関する研究動向 —銅製鈴の形態変化と通時分析の可能性—

井関睦美

(慶應義塾大学 SFC 研究所)

1. はじめに

アステカ（ナワ）文化は、後古典期後期（後 1200～1521 年）、メキシコ中央高原の現在のメキシコ市を中心に繁栄した。一般に「アステカ王国」と呼ばれる国は、中央高原の都市国家であるテノチティトラン、トラコパン、テスココが、1428 年に結んだ三都市同盟を基盤としており、スペイン人到来時には、広くメソアメリカに政治的・経済的・文化的影響力を及ぼしていた。この三都市の中でも王国の中心的な存在であったのが、1325 年に建設されたメシーカ人の都、テノチティトランである。テノチティトランからの出土遺物や、主神殿であるテンプロ・マヨールの構造といった物質文化には、王国の繁栄の過程が顕著に現れている。とくにテンプロ・マヨールは計 7 回にわたる神殿更新の各年代がほぼ特定されているため、おもな出土遺物である供物複合（オフレンダ）は、文献史料に記録されたアステカ王国史との照合も可能である。オフレンダの内容物からは、王国発展に伴う流通網拡大の様子や加工技術の変遷、またメシーカ人の思想変容などを観察することができる。しかし実際には、後述するように、いくつかの要因から通時研究は避けられる傾向にある。

本稿では、出土遺物の通時的分析法の可能性を探るため、オフレンダのなかでも出土傾向に特徴のある銅製の鈴を例に挙げる。まず第 2 章ではテンプロ・マヨールの構造とオフレンダの特徴をまとめ、第 3 章でオフレンダの研究動向について概観する。第 4 章では銅製鈴の形態、埋納量、埋納状況の変化から、メシーカ支配者層の間における銅製鈴の象徴性を分析し、その変容の過程を考察する。最後に、通時分析の事例研究と今後の方向性を議論する。

2. 主神殿テンプロ・マヨールの構造

テノチティトランはテスココ湖上に人工的に造られた島の上に建設され、その中心の祭祀地区にはピラミッド型の神殿がそびえていた（図 1）。主神殿テンプロ・マヨールは、頂上に二つの神殿があることから、双子神殿とも呼ばれている。ピラミッド自体は西向きで、北側が雨の神トラロック、南側が戦いの神であり太陽の化身でもあるメシーカの守護神ウィツィロポチトリに捧げられていた。メシーカの宗教観では、太陽神に活力を与えるために、生贄の心臓を捧げ続けることがメシーカ人



図1 主都テノチティランの祭祀地区（メキシコ市テンプロ・マヨール博物館 井関撮影）

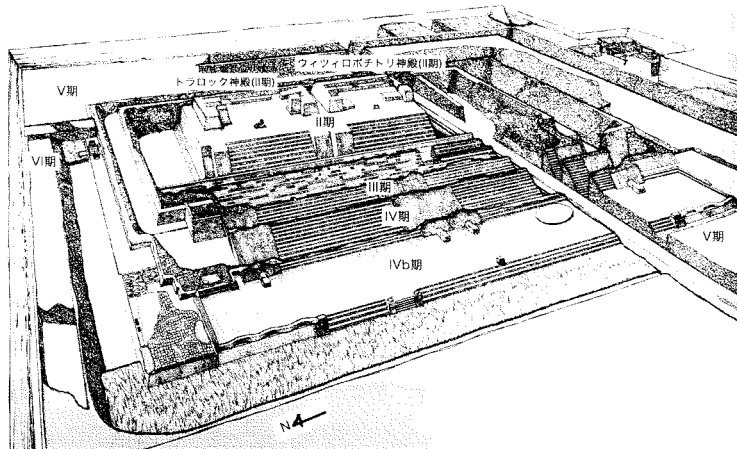


図2 主神殿テンプロ・マヨールの神殿更新（II期～VI期）
（Townsend 2009: 152 より引用・改編）

の使命であった。その生費を確保するための戦いが、実際には政治・経済的な王国の勢力拡大とも結びついていた。

テンプロ・マヨールは、1521年以降スペイン人によって破壊され、現在は部分的に遺構が残存しているのみである。最大時には基壇の底辺が82m×82m、高さは40～50mほどあったと考えられている [Matos 2001: 198]。1978年から続く発掘調査により、合計7回（I～VII期）の神殿更新が確認されている。I期は地盤沈下によりすでに調査不可能なため、現在観察できる最も古い神殿部分はII期に相当する（図2）。より新しい更新段階は、II期の神殿部分を囲うように、四方の壁面や正面階段、基壇などが部分的に残存している。なかでもIV期の残存率が最も高く、現在一番外側にある正面階段、装飾された壁面はこの期に属する。三都市同盟後の王国拡大期に相当し、最も大規模な

拡張期であったIV期は、IVaとIVbとに分けられている。IVa期とIVb期の間は、主神殿周辺のいくつかの小規模な神殿の建築が始まった時期でもあり、後述するように、出土遺物の種類や加工技術にも大きな変化が見られることが分かってきている。

テノチティトランの王朝史は11代まで続いたが、各期は歴代の王の在位期間とほぼ対応している(図3)。年代特定の根拠となっているのは、ウィツィロポチトリ神殿側の外壁に彫刻された暦を表す4つの絵文字、すなわち、II期の「2のウサギ(1390年)」、III期の「4の葦(1431年)」、IV期の「1のウサギ(1454年)」、IVb期の「3の家(1469年)」である。各暦年が含まれる王朝を更新段階に対応させ、V期以降は「各期につき一人の王」という割合で振り当てている [Matos Moctezuma 1988: 62-74; López Luján 2005: 52-4]。

更新段階(期)	年代	メシーカ王
I	AD 1325-1375	
II	AD 1375-1427	アカマピチュトリ、ウィツィリウイトル チマルボボカ
III	AD 1427-1440	イツコアトル
IVa	AD 1440-1469	モテクソマII世
IVb	AD 1469-1481	アシャヤカトル
V	AD 1481-1486	ティソック
VI	AD 1486-1502	アウツォトル
VII	AD 1502-1520	モテクソマII世

図3 神殿更新段階と対応するメシーカ王朝

3. 主神殿の供物複合(オフレンダ)の研究動向

主都の祭祀地区建造物から出土している供物複合は、一般にスペイン語で「オフレンダ」、つまり「神々への奉納品」と呼ばれている。装飾土器、神々の石像、人間や動物の骨、儀礼道具などが石箱や石室に収められ、基壇、階段、神殿部の床下などに直接埋納されたもので、主神殿とその周辺からは現在までに140組以上が出土している。オフレンダは、神殿更新記念、旱魃時の雨乞い、神官・支配者の埋葬など、様々な目的で作成された [López Luján 2005]。その出土地点から、ほとんどのオフレンダは埋納時期の特定が可能である。オフレンダの内容物は、一般的に1段から6段の層で構成されている。一番下に海の砂や魚の骨、貝類で構成された水の世界をイメージした層があり、上層になるにつれて徐々に地上的な性格が強くなり、最も構成要素の多い一番上の層には、動物の骨や人間の頭蓋骨、神々の像などが並べられている。オフレンダには、メソアメリカ各地の産物や動植物、美術品などがふんだんに取り込まれ、アステカの世界観を具現化すると共に、王国の勢力拡大の過程を反映している。

オフレンダは、アステカ考古学では唯一、出土遺物の年代を特定できるデータである。しかし現在、オフレンダ遺物は通時分析には適さないという見解が主流である [López Luján 2005]。その理由として、次の2点が挙げられる。第1に、テノチティトラン自体の歴史(1325~1521年)が200年弱と短い上に、発掘調査がIV期以降(1440年~)に集中している点である。この短期間に、出土遺物から読み取れるほどの技術的・文化的な変化は無いと考えられている。とくにアステカ研究には植民地時代の文献史料が多いことから、オフレンダ分析も文献研究の成果に依存する傾向があ

る。第2に、神殿の残存状態が更新段階の観点から見ると不均等で、発掘数も各期ごとに大きな偏りがあるため、時期の違いによる比較研究は有効ではないとみなされている点である。例えば、最も宗教観が表現されるはずである頂上の神殿部は、王国史の初期にあたるII期のものしか残存していない。以上の2点から、更新段階に基づくオフレンダ内容物の変遷は、分析対象としてはあまり重視されていないのが現状である。オフレンダ研究では、テンプロ・マヨール発掘調査団団長のロペス・ルハンが1994年に発表した、各オフレンダの構成要素の類似性に基づくグループ化、という研究が基本データとなっている[López Luján 2005]。その後も、例えば、特定のオフレンダの機能分析[Olmo Frese 1999]、貝製品などの特定の物質に限定した研究[Velázquez Castro 1999]、埋葬に関連するオフレンダ[Chávez Balderas 2007]など、時空間を固定した共時的研究が中心となっている。

4. 銅製鈴の形態と意味・機能の変化

金属製の鈴は、絵文書や民族史文献では、紳々や支配者層の装身具として描写され、高い価値が付与された威信財であった。主神殿のオフレンダからも、銅製鈴が約3,400点記録されている。その出土状況には明らかな傾向があり、アステカ王国発展の歴史的過程を体現していると考えられる。金製や銀製の鈴は少数で、資源の豊富さ、鑄造の容易さ、冶金術の多様性から、銅製が意図的に選択された可能性がある。以下の節では、まづメソアメリカの金属加工技術史における銅の意味とアステカ王国時代の流通経路をまとめる。そしてこの歴史的背景を考慮しながら、オフレンダ出土の銅製鈴の意義を考察する。

4-1. 銅の生産地と流通

メソアメリカの金属加工技術は、後600~700年頃にメキシコ西部(現在のハリスコ、ミチョアカン、ナヤリット、コリマ、ゲレロ州などを含む)で始まった[Hosler 1994: 3](図4)。初期の金属加工に使用されたのは、この地域に豊富な銅であった。銅は他の金属と比較して資源が豊富で加工も容易であったため、鈴、指輪、針、鑷子(ピンセット)、釣り針、斧、千枚通しなど多くの銅製品が生産された[Hosler 1994: 89]。その後、1200年以降に同地域で冶金術が大きく発展した。銅製品は、融点を下げるために砒素や錫を混ぜた合金として加工されたが、完成品の色合いにも変化をもたらすことが認識されていた。砒素の比率を高くすることで銀色を、錫を多くすることで金色を強調するといった、さまざまな冶金術も開発され、金や銀の代替物としても使用された[Hosler 1994: 229]。なかでも合金素材、様式、デザインなどの技術・加工面で多種多様に製造された製品が、鈴であった[Hosler 1994: 168-9]。

アステカ王国時代の主要な金属製品の加工・生産地域は、メキシコ西部とメキシコ東部のワステカ地方であった[Hosler 1994: 127]。アステカ王国支配下の諸都市に課された貢納品を記録した『メンドーサ絵文書』には、ゲレロ州のキアウテオバンという町が、銅製の鈴40個と銅製の斧80丁の貢納を半年ごとに課されていたことが描写されている[Berdan and Anawalt 1997: 90-1]。図像の特徴から、この鈴はタラスコ様式と特定でき、合金には錫を使用していたと考えられる[Hosler 1994: 224]。錫の生産地と鈴の加工地は、アステカの圧力に最後まで屈しなかったタラスコ王国の支配領域にあ

った。そのためキアウテオバンは、流通上の媒介者として、タラスコ王国で製造された鈴を入手し、テノチティトランへ搬送していたと考えられる。

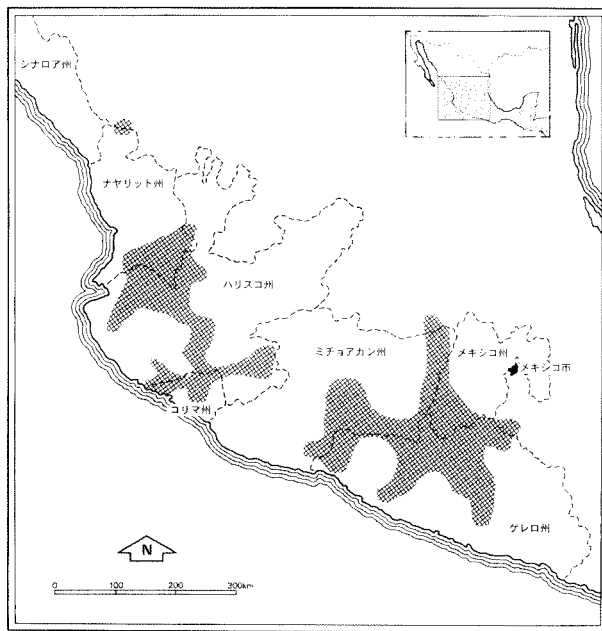


図4 メキシコ西部 グレー部分は銅の生産地
(Hosler 1994: 23 より引用・改編)

アステカ王国は、経済戦略の一つとして、まずは経済的・文化的に豊かな都市国家を征服し、定期的な貢納の義務を課した [Berdan and Smith 2003]。さらに、征服した地域で獲得できる資源、農産物、工芸品だけではなく、その土地とはまったく関係のない物資の貢納を義務化することで、その地域に独自の流通網を構築させた。こうした戦略によって、王国自体はインフラ整備や労働力に大きな投資をすることなく、メソアメリカ圏内だけではなく圏外への遠距離交換網を急速に発達させることが可能になった。キアウテオバンに課せられた鈴は、そのような戦略の一例と言える。また、鉱山地域から離れたワステカ地方における冶金術の発展も、この経済戦略による技術の伝播と考えられる [Hosler 1994: 224]。

スペイン人による征服直前には、テノチティトラン内でも銅を含む金属加工生産が行われていた。現在までに作業場の遺構や遺物は出土していないが、金属製品以外にも様々な威信財が製造されていたことが文献史料に記録されている [Sahagún 1953-81: Bk 9]。王国支配領域を超えた交換網が発達し物流が盛んになると、支配者層の威信財への要求に応えるため、王国の管理の元に主都にも製造技術が導入され、さらにメシーカ独自の加工技術が編み出されていった。モレーロス州のアステカ支配下にあった都市では、溶解してリサイクルされた金属加工品も遺物として出土しており [Hosler 2003: 170]、原材料の入手が困難な錫を含む合金は、主都でリサイクル生産された可能性もある。このような歴史的背景を体現している物質文化の一つが、以下に述べる主神殿出土の銅製鈴のデータである。

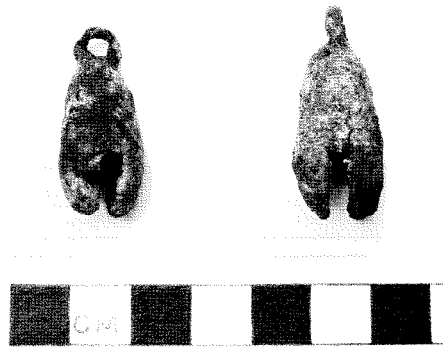


図5 オフレンダの銅製鈴（洋梨型）

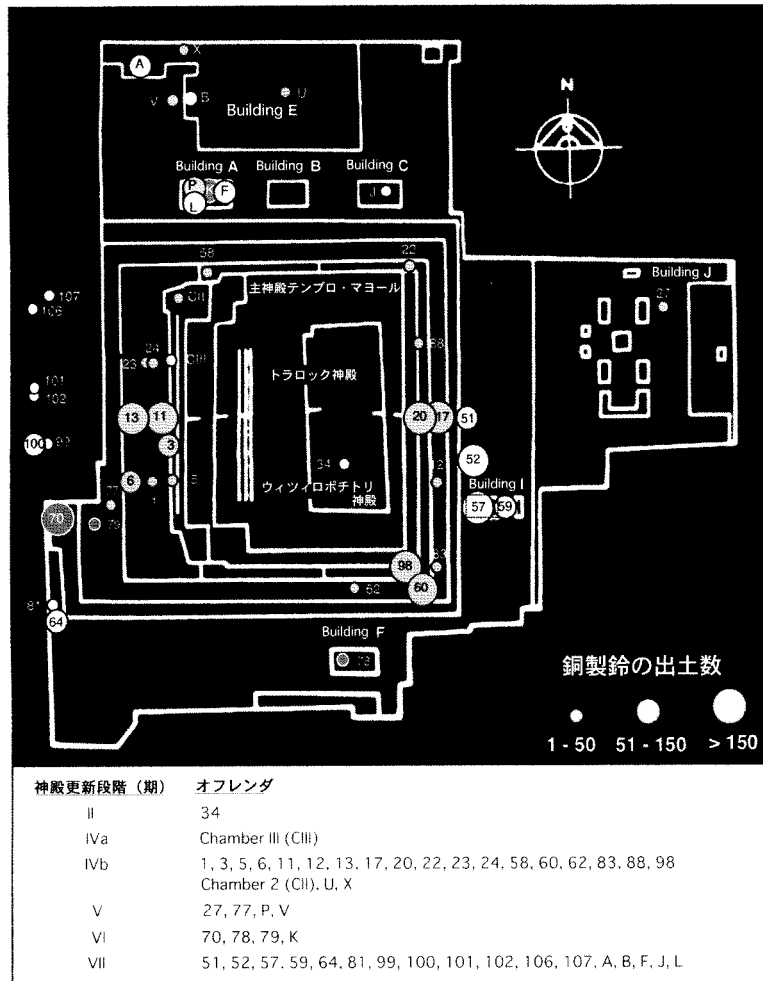


図6 銅製鈴が含まれるオフレンダの位置
(Schulze 2008: 240 より引用・改編)

4-2. 主神殿オフレンダ出土の銅製鈴

テノチティランの祭祀地区から出土している銅製品には、指輪、針、鑑子、ミニチュアの王冠なども数点あるが、その9割以上は鈴である(図5)。シュルツ [Schulze 2008] は、メキシコ市のテンプロ・マヨール博物館に保管されている、約3,400点の銅製鈴を記録し、形態分類、成分分析などのデータをまとめた。そのうち、235点は所属不明、398点が破片なので、形態分類のデータとなるのは、およそ2,760点である。合計48組のオフレンダから出土しており、主神殿が39組、IVb期以降に建設された周辺建造物 (Building A, B, C) が9組である。前述した発掘状況の不均衡さを考慮しても、IVb期から急激に出土数が増えていることが観察できる(図6)。そして主神殿の出土地点は、おもに中心よりウィツィロポチトリ側、つまり神殿南側のオフレンダに多く含まれていることが分かる。シュルツによると、IVa期とIVb期の間には加工技術や美術様式の変化が見られる。それらの変化から、主都での加工・製造が可能になったことも推察されている。IVa期は三都市同盟結成直後の王国拡大初期であり、IVb期の出土量の増加と様式の変化は、前述の貢納システムの確立を示唆している。

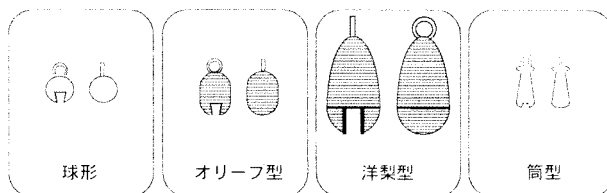


図7 銅製鈴の形態分類 (Schulze 2008: 236 より引用・改編)

シュルツは銅製鈴を4種類の形式、すなわち球形、オリーブ型、洋梨型、筒型に分類している(図7)。洋梨型は長さ4cmほど、球形とオリーブ型は幅1cm程度なので、大きさでは明らかに異なっている。全出土量の45%が洋梨型で、とくにIVa期、IVb期、V期ではおよそ80%を占める。一方でVI期になると、63%が球形になり、洋梨型はわずか25%となる。VII期では、89%が球形である。実際の出土遺物は、錆びや変形、複数個での結合が多く、とくに球形とオリーブ型の判別は非常に困難であるが、V期を境にそれまで大多数を占めていた洋梨型が急激に減少し、サイズの小型な球形に取って代わられることは明らかである。IVb期から主都での加工生産が始まったと仮定すると、V期以降の形態変化からは、新たな様式の流行や鈴自体に付与された象徴性の変容が考えられる。

筆者は、2010年の3月と8月にテンプロ・マヨール博物館で行った調査で、保管されている銅製鈴の中でも、出土状況の記録が確認できる43組のオフレンダに属する700点余を対象に、実物の写真撮影、出土遺物一覧と出土記録図面とを照合するデータ収集をした。一般に銅製鈴は、貝や魚の骨など水に関連した生物の周辺や、儀礼用ナイフの周囲に多く見られる傾向がある。しかしVII期の出土状況では、儀礼用ナイフとの関連性がより高くなっている。

金属製装飾品は、その輝く色から太陽神や月の神の属性とされることが多い[Hosler 1994: 228-32]。オフレンダの銅製鈴は、ウィツィロポチトリ側に集中しているため、太陽神や太陽信仰との結びつきが強いと言える。また鈴は、その音色から雷や雨をもたらすとされ、雨乞いや豊穡の儀礼で使用

されていた [Hosler 1994: 233-46]。オフレンダの銅製鈴の場合、洋梨型に付属する舌（鈴内部で音を出す部分）が球形には無いため、小型の鈴には音を発する機能は重視されなかったと思われる。この形態の変化から、水を連想させる音色を発する機能から、球形の水の粒という象徴性へ、という鈴の属性の変容が観察できる。儀礼用ナイフとの関連は、太陽信仰に不可欠な生け贄の血液（＝貴重な水）という象徴性を推測させる。ここには、王国拡大に伴う宗教観やその表現法の変化という歴史的背景が影響している。

5. おわりに - オフレンダの通時的分析の可能性

銅製鈴の出土状況や形態変化からも、IVa 期以降にメシーカ社会内で大きな思想変化があったことは明らかである。III 期の後半は三都市同盟結成（1428 年）に相当し、IVa 期はモテクソマ 1 世がメキシコ盆地の外へと進出を開始した時期である。IVb 期以降の勢力拡大過程で、アステカ王国の支配を正当化するためにも、三都市同盟の中核であるメシーカ人は、その宗教・政治思想を物質文化で表現し、対外的にアピールする必要があったはずである。

IVa 期と IVb 期に加工技術、材質、美術様式などに大きな差異が見られる工芸品として、銅製鈴の他にトルコ石製装飾品が挙げられる。トルコ石も、銅製品と同様に遠距離交換を経て主都に貢納されていた威信財で、主都から 1,500km ほど北方の現在のアメリカ合衆国のアリゾナ州やニューメキシコ州に産地があった。メルガーとソリス [Melgar and Solis 2009] によるトルコ石モザイクの加工技術の実験考古学的研究では、主神殿 IVa 期出土のヘビ型ナイフに装飾されている青い石の組成は、ほとんどがメソアメリカ内に産地があるアジュライトやマラカイトなどで、トルコ石は少量しか含まれず、加工技術も単純であったことが示されている。しかし VI 期の木製盾には、純粋な北アメリカ産のトルコ石のみが装飾として使用され、加工も細かく緻密になっている。メルガーとソリスの研究は、三都市同盟以降の王国拡大期に、王国内でのトルコ石自体の価値が変わった可能性や、トルコ石の流通経路や加工技術の変化、さらにそれに伴う周辺諸国との関係性の変化を示唆している。筆者の論文 [Izeki 2008] でも、トルコ石の出土状況分析をまとめているが、更新段階ごとの変化を追う方法でメルガーらの成果と重ねれば、物質文化の視点からの、王国拡大の政治・経済的、そして文化・思想的背景が見えてくると考えられる。

銅製鈴とトルコ石製装飾品以外にも、このような王国拡大の歴史背景を体現するものとして、主神殿出土のコヨルシャウキ女神像の図像変化も挙げることができる [井関 2010]。ウィツィロポチトリの敵対者として伝説や神話で語られているコヨルシャウキの図像は、IVa 期から IVb 期において飛躍的に複雑になり、V 期以降の図像はさらに太陽信仰を表すモチーフが多くなる。これは、神話上の敗北者であるコヨルシャウキに太陽への生け贄の属性を強調することで、ウィツィロポチトリに象徴されるアステカ王国の支配力をアピールしたものと考えられる。

このような祭祀地区からの出土遺物は、メシーカ支配者層が意図した世界観を表している。しかし主都で確立した政治・宗教的思想は、同時代の他の人々にも等しく共有されていたわけではない。この点を考慮しながら、主都以外の都市や文化に属する同素材の遺物と比較することで、メシーカ思想に対する各地方の認知度や独自性も明らかにすることができるだろう。

【謝辞】

本稿は、平成 21-25 年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（領域代表：青山和夫）の成果の一部である。

参考文献

- Berdan, F. F., and P. R. Anawalt
1997 *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley.
- Berdan, F. F., and M. E. Smith
2003 The Aztec Empire. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by M. E. Smith and F. F. Berdan, pp. 67-72. The University Press of Utah, Salt Lake City.
- Brumfiel, E. M.
1987 Elite and utilitarian crafts in the Aztec state. In *Specialization, exchange, and complex societies*, edited by E. M. Brumfiel and T. K. Earle, pp. 102-118. Cambridge University Press, Cambridge.
- Chávez Balderas, X.
2007 *Rituales funerarios en el Templo Mayor de Tenochtitlan*. INAH, Mexico.
- Hinojosa Hinojosa, J. F.
1999 Hundimiento del Centro Histórico de México-Tenochtitlan. In *Creación & Cultura. Revista Internacional de Arquitectura. Artes, Diseño*, Year 1, No. 2: 23-34.
- Hosler, D.
1994 *The Sounds and Colors of Power: The Sacred Metallurgical Technology of Ancient West Mexico*. The MIT Press, Cambridge MA.
2003 Metal Production. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by M. E. Smith and F. F. Berdan, pp. 159-171. The University of Utah Press, Salt Lake City.
- Izeki, M.
2008 *Conceptualization of 'Xihuitl': History, Environment and Cultural Dynamics in Postclassic Mexica Cognition*. BAR International Series 1863. Archaeopress, Oxford.
- 井関睦美
2010 「アステカ王国拡大期におけるコヨルシャウキ女神の図像変化」『古代アメリカ』第 13 号、pp. 41-52.
- López Luján, L.
2005 *The Offerings of the Templo Mayor of Tenochtitlan*, (Revised Edition) translated by B. R. Ortiz de Montellano and T. Ortiz de Montellano. University of New Mexico Press, Albuquerque.
2009 The manufacturing techniques of the turquoise mosaics from the Great Temple of Tenochtitlan, Mexico. Paper presented at The 2nd Latin-American Symposium on Physical and Chemical Methods in Archaeology, Art and Cultural Heritage Conservation & Archaeological and Art Issues in Material Science.

Matos Moctezuma, E.

- 1988 *The Great Temple of the Aztecs. Treasures of Tenochtitlan*, translated from Spanish by D. Heyden. Thames & Hudson, London.

Olmo Frese, L.

- 1999 *Análisis de la ofrenda 98 del Templo Mayor de Tenochtitlan*. INAH, Mexico.

Sahagún, B. de

- 1953-81 *Florentine Codex*, translated by A. J. O. Anderson, and C. E. Dibble. 12 vols. Monographs of the School of American Research, Santa Fe.

Schulze, N.

- 2008 El proceso de producción metalúrgica en su contexto cultural: Los cascabeles de cobre del Templo Mayor de Tenochtitlan. Unpublished Ph.D. Thesis presented to the National Autonomous University of Mexico.

Townsend, R. F.

- 2009 *The Aztecs*. (Third Edition) Thames & Hudson, London.

Velázquez Castro, A.

- 1999 *Tipología de los objetos de concha del Templo Mayor de Tenochtitlan*. INAH, Mexico.